

羽田空港(東京都大田区)で国際シンポジウムや公開講義を聞き「知の集積場」とする構想がスタートしている。来日した海外の著名な学者らに、搭乗待ちの時間を利用して講義をしてもらおうという。第一弾として十月、国際経済などをテーマにしたシンポジウムを開く。(松村裕亨)

# 羽田空港 知も発着

大学講義、シンポ、図書館…

構想は、二〇一〇年の羽田空港の本格的な国際化を機に浮上し、国際教養大(秋田市)の中嶋領雄学長が提唱。国際教養大のほか国際基督教大(東京都三鷹市)、早大国際教養学部(新宿区)、立命館アジア太平洋大(大分県別府市)が参加の意向を示した。

知的な国際ハブ(拠点)空港とする狙いから「HUB A(エアハブ・ユニバーシティ・ハブ・ハネタ・エアポート)」構想と名付け、推進する有識者会

議に、安倍晋三元首相(自民)や鈴木寛元文部科学副大臣(民主)、東京都の猪瀬直樹副知事、国土交通省や外務省の事務次官も加わった。羽田空港のターミナルビルを運営する日本空港ビルデングが事務局を務める。羽田空港には、シンポなどに使用可能なホールが国内線第一ターミナルにあるが、構想ではセミナー室や図書館などを新設。各大学が公開講義などを開き、国内外の学生や社会人が受講する。ネット配信による受講や、学生の単位を互換できる仕組みをつくる。

第一弾のシンポは、十月に国際通貨基金(IMF)総会が都内で開かれるのに合わせて開催する。次回はアフリカの人材育成をテーマに計画し、アフリ

カ諸国の駐日大使や留学生に加え、ネット中継でアフリカの学生にも公開する。

また、日本空港ビルデングが羽田空港を産業界用ロボットのショールームや実証実験の場にする特区を目指していることから、ロボットに関するシンポも候補に挙がっている。

アジア諸国の空港に比べ、日本の空港のハブ化が後れをとる中、中嶋学長は「教育や文化など、日本でなければできない知的機能を付け加えたい。羽田の発展だけでなく、日本の活力を高めた」と話している。